

郷土保護¹

エルンスト・ルードルフ（著）桂修治（訳）

Heimatschutz

Von Ernst Rudorff. Übersetzt (Japanisch) von Shuji Katsura

あるスペインの小説家がセヴィリアの近代化について次のように書いている。「文明化とよばれる現代のプロクルステス²のおかげで、地方色や国民的景観はなくなってゆく。しかしこのような見方を口に出して言おうものなら、それは即座に世人の声によって圧殺されてしまう。世人はひたすら物質的繁栄という現代の原則に貫かれ、支配されているのだ」と。これはスペインについての話であるが、ここにいくつかのドイツ的なヴァリエーションを提示することが本論の目的である。

今日、心の深い欲求に動かされて自分の住処を出、戸外に安らぎを求めようとする者は、手痛い傷を負うことをはじめから覚悟しておかなければならない。この事態は、年を追うごとにひどくなっている。ここ数十年の間にこの世界は、そしてとくにドイツはどうなってしまったのだろうか。美しい姿の山々、川、城、古い都市の数々、つまり私たちの美しい、素晴らしい郷土はどうなってしまったのだろうか。かつてはウーラント、シュヴァープ、アイヒェンドルフのような詩人たちがこれらに魅了されて不滅の歌を書き、またルートヴィヒ・テイク、アルニム、ブレンターノらは、ハイデルベルク城の美しい姿を讃えたのだったが。私たちの祖国の大きさからすれば、一人ひとりの人間が見ること

¹（訳注）この翻訳は、Ernst Rudorffが雑誌 *Grenzboten* に寄稿した論文「郷土保護」(Heimatschutz 1897)の原文を基にしたものである。Heimatschutz, in: *Grenzboten*, 56. Jg. (1897), Nr. 2, S. 401 - 414 u. S. 455 - 468.

²（訳注）プロクルステス：ギリシャ伝説中の人物。メガラからアテネへの道中に住んでいた盗賊で、旅人を自分のベッドに寝かせ、体がベッドより短ければ引き延ばし、長ければはみ出た部分を切り落として殺したと伝えられる。派生語の「プロクルステスのベッド」(Prokrustesbett)は、「無理やりに合わせようとする定まった型」の意味で用いられる。(国松他編、独和大辞典による)

ができる範囲は限りなく小さいものである。それだけいっそう愕然とするのは、目を見開いている人間が誰も、その極めて狭い視野の中で絶えず、何という変貌 — 破壊といっても過言ではない — を経験しなければならないかということである。一方では、自然のすべての財産と可能性があらゆる種類の工業施設によって奪いつくされておられ、また河川誘導や鉄道や伐採、その他、物質的利益の追求にだけ向けられた容赦ない方策によって景観が力づくで破壊されている。そこでは、美や诗情が失われてしまおうとお構いなしである。他方では、観光客を集めるための投資と、景観の魅力のうるさい喧伝が行われる。そして同時に、あらゆる根源的なもの、つまりまさに自然を自然ならしめているものが破壊されていくのである。

概して南ドイツは北ドイツに比べて、活力と健全な民俗固有の性格を今なおより多く残していることは認めなければならないだろう。ある観点から見れば、この地方の景観もこの事情に対応しているといえる。乱暴な農地施策の影響で、北部・中部ドイツのほとんどの地域は、ほんのわずかな例外を除いて、たいはいひどく姿を変えてしまったのだが、ドイツのいくつかの地域、特にバーデン、ヴェルテンベルク、バイエルンは多少ともこの影響を免れている³。ドイツで半世紀前に導入された農地統合⁴（農地を耕作に都合がよいように統合すること）は、直線や直角という殺風景な区画原則をやみくもに実行に移してしまった。この施策は、その実際の施行も極めて暴力的で、この施策が嵐のように通り過ぎて行ったあとの田園風景は、国民経済の計算問題がそのまま形になったような様相を呈している。外的世界の事物に対する人間の支配は、もはや地主の下男・下女に対する支配関係ではない。こちらの支配関係は、従者に対しても、どのような隷属的關係であろうとも自立的存在としての一定の権利を認めているからである。これに対して、自然は奴隷にまで貶められている。そこでは自然には、それとは無縁な抽象的な利用の仕組みが軛のように暴力的に押し付けられ、その持てる力は最後の一滴まで搾り取られるのである。直線に直され、水溝に姿を変えられた川、直線化された森林の境界、一直線の、急勾配の上りになっていることもある広い野道。丁寧に均された土地には、谷あいの道や固

³（原注）北ドイツでは、リップペ・デトモルト侯国は一つの救いとなる例外である。

⁴（訳注）農地統合とは北ドイツで *Verkoppelung*、南ドイツで *Flurbereinigung* と呼ばれる農地政策を指すが、これは、細かく分割された農地ないし耕地をより大きな単位に統合し、農道の整備なども行って、農業の生産効率を上げようとする施策である。

有の野生の動植物が生息する湿った場所はもはやどこにもない。農地の周辺や草原には、その地の人々や散策者が休んだり、小鳥たちが巣を作ったりできるような茂みや灌木がどこにもない。これが、このように作り上げられた地域の殺伐とした風景である⁵。

自分の故郷で、自然がこのように切り刻まれるのを経験してきている人間は、バーデン地方で、自然な輪郭の自由さ、あるいは土地の様々な部分、森、川、草原、農地、灌木、果実の樹木、道、小径などがあたかも睦まじく結婚しているかのように存在している有様と再会すると、当然のごとく、ほっと息をつくような気持ちになるのである。

北ドイツや中部ドイツでは村落でもすでに、赤レンガの箱のような殺伐とした建物や大都市的な醜悪さという工場の図式が、残念ながら当たり前になってしまっているのだが、このようなところと比べれば、バーデンやシュヴェーベンの地域の多くでは、農村集落でも民族固有の古い建築様式がきわめて豊かに守られている。ずっと周辺の地域 — 南はアルプス、北は荒地や湿原 — は最近までこのようなひどい仕打ちを免れているように見えた。ところがニーダーザクセンの平地（最近ここでは、あのがっしりした、ほとんどタキトウスの家のような太古の建物でも、2000年の保護と単独所有の後、その隣に無趣味な近代的な侵入者が来るのを受け入れざるを得なくなっている）と同じように、バイエルンやチロルの山々でも、絵のように美しい活気ある山岳家屋に代わって、都会的な形式の別荘が建ちはじめているのである。

いつも新しいことのさきがけをする都会で、事情はさらに十倍もひどくなっていることは、当然のことである。一つ一つを見れば、無趣味さや信仰心の無さにも程度の違いはあるかもしれない。しかし大かたにおいて、団地住宅やこれ見よがしにがっしりした近代建築がまかり通るのは、どこも同じである。投

⁵（原注）我々の国では鳥たちが孵化する場所が破壊されている。これは農地統合と共有地分割の結果であるだけでなく、そもそもこの国の経済施策の容赦ない合理主義の結果でもある。その上に、全世界での大量の鳥の殺害が加わってくる。文明化された世界の何百万という女性たちが、帽子を鳥の羽根や鳥の体で飾る（その趣味の悪さはぞっとするほどだ）が、このような流行狂いの女性たちのために、熱帯地方の素晴らしい種の小鳥たち — シラサギ、ハチドリなど — が殺されているのである。南ヨーロッパの地中海地域の国々で、コマドリ、シジュウカラ、ツバメその他の鳴禽類を軽率に殺すことを、厳格な法制度で禁止しなければ、早晚、私たちのところにいるこの種の自然生物も殺されることになるであろう。いつになったら各国政府がこのことに気付き、この迫り来る危機に対して共同歩調を取るべく立ち上がろうとするのだろうか。

機熱や無思慮な革新欲、空疎な優雅さが、あちらでもこちらでも、過去の時代の性格豊かな遺産を押しつけてしまうのである。

件のバーデン地方の例を挙げてみると、コンスタンツでは現在、公表されたところでは、ある団体が、公会議場の大広間（フスが公会議 — 宗教裁判 — において弁明を行ったところ）を「活用可能」にするように働きかけている。この人々はこの立派な広間（数十年前にあまり趣味のよくない改修が行われたが、それでも今日まで、大方において本来の姿のままに残されている）を音楽堂につくりかえ、建物全体をそれに合うように改築しようとしている。この計画やこれに類似した、ドイツの重要な建築文化財の一つを汚そうとするような計画は、当然ながら、断固拒否してほしいものである。

ザクセン地域文化財研究・保護委員会は、最近一つの声明を出した。コンスタンツのみならずどの地域においても、この声明の内容に真摯に注目・留意してほしい。ここではとくに次のようなことが謳われている。「すべてを變形してしまう現在において、我々のドイツ民族の過去の文化遺産は、これまで以上に保護を必要としている。今日の職業生活や交通生活の高まりは、前時代の創造物がかつてなかったほどに脅かし、かつての火事、戦争あるいは粗野な破壊欲よりもはるかに深刻に、その存在を揺るがしている。我々の都市や村落がその様相を変貌させているのは、ほとんど一目で見とれるほどである。くつきりした独自の様式による古い農家、意味深長な碑銘をもつ都市の古い家屋、さらに門や塔、そして絵のように美しい古い街路景観、これらが次々と姿を消している。そして家がなくなると同時にそれらを飾っていた古い美術品もなくなり、家の中に置かれていた古い貴重な家財道具も消え失せてゆくのである。前進を急ぐ現在の歩みは、多くの教会建築やその他の文化財的建造物の前ですら、立ち止まろうとせず、これらの建築物の存在を脅かしてきている。このような前時代の文化遺産は我々の国の誉れであり、我々の民族の誇りである。とりわけ、幼年時代からこのような文化遺産の姿に慣れ親しみ、老年までこれらとともに生きてゆこうという人間にとって、また、これらの文化遺産によって深く彩られた生活や創作の場に生きる人間にとっては、これらの文化遺産はなおのこと貴重である。しかしこれら文化遺産の持つ意味はそれ以上のものである。それらは、我々の祖先の芸術活動のもたらした創作物として、我々の目を楽しませるだけではなく、しばしば我々自身の創造の模範ともなるのである」。とりわけこの最後の言葉は強調しなければならない。というのも、今日しばしば見られことであるが、例えば一つの単独のゴシック教会を保存し、美しく修復

するが、その周囲では、はばかりことなく「開放配置への執着」⁶に固執し、かつさまざまな種類や様式の近代的な空疎な建物を建てるのが流行している。これでは十分でないことは明らかである。そうではなく、我々の祖先たちの思慮豊かで情感に満ちた、真に創造的な作品から学び、先人たちの精神や感覚に対応しているものだけをその近くに配置するように努力しなければならない。もちろん、この前者のやり方があちこちで行われていることは、真剣な最近の建築家の一連の建造物を見ればわかることである。ところが後者に関しては、我々はまだまだ程遠い状態にある。それというのも、個々の芸術家の有能さも、工場的な作業をする大勢の建築業者を相手にしては多勢に無勢だからである。この連中はあらゆる様式ジャンルでぞんざいな仕事をばらまいており、そのおかげで、とくに優雅であってほしい新市街や別荘地などでも、あらゆる時代や地域のつぎはぎになっていて、まるでコメディでも演じようかというような具合になっているのである。現代の全体的気分もこのようなありさまに呼応している。そこでは、精神的な努力をまったく理解せず、もっぱら外面的な輝きと効果を狙うこと、快適さや物質的享樂の追求することにとらわれている。このような風潮が最も顕著に現れているのは、ドイツらしさを誇張した、中世様式のいくつかの外面的特徴のこれ見よがしの表現であり、これは全体的な陳腐さを背景として、ただ不快感を引き起こすだけである。

今日の圧倒的多数の人々から見れば、歴史的感覚や真の美的感性など何の意味もない。これらは、彼らがその意味をもはや想像することもできないような色あせた言葉にすぎないのだ。今日の平均的人間が、ある家屋、ある道路、ある都市を「美しい」という場合、その人々は間違いなく、(一人の理性的人間から見て)このような対象に魅力や興味を付与していると思われる要素をほとんど見落としているといえる。例えば、優しさは、かつてさまざまな様式時代において、ドイツの家屋建築の基本的特色を形成していたものであり、家屋という存在の全体が、外部に対しても温かい気分を与えつつ、この優しさに貫かれていたものである。このような優しさは、なくなってしまったのも同じである。このようなことを何よりもよくあらわしているのは、粗レンガ造りの建造物に

⁶ (原注) これについては、ウィーン建築家ジッテが近代の都市構成について著した興味深い書がある。

(訳注) 開放配置(Freilegung)とは、教会などの建築物を広場の中央に配置し、その周囲を開けておくことを意味する。ジッテはこのような都市計画の流行を「開放配置への執着」(Freilegungswahn)とよび、建築物の効果が分散されるとして批判している(Camiro Sitte: Städtebau, 33)。

つきものの、機関車庫のような風情の平らすぎる窓枠飾りのアーチや、もっと広くいきわたっているものとしては、横棧の区切りがない、目いっぱい大きくした窓ガラスがある。これは近頃の無趣味な発明であり、空疎、平板、退屈なものの骨頂であるが、大金持ちから靴修理人にいたるまでの上品ぶりが人間には理想的なものなのである。さらに、それ自体正しい考えでも、誇張によって結局愚かしいものになってしまいかねないことは、通気や光を求める試みのまことに滑稽な墮落が示しているところである。このような努力を手本にして流行に走るほとんどの建物は、はっきりわかるほど大きい窓の開口を誇示している。それは、不合理な階の高さも相まって、あらゆるプロポーション感覚を無視したものである。しかし、ここまでして取り入れられた日光は、三重のカーテン（厚いのやら薄いものやら、明るいものやら暗いものやら）で再びさえぎられる。普通の生き物なら、空気と光が足りないために、いっそのこと、こんなカーテンは取り壊し、こんな巨大な窓ガラスは割ってしまったほうがよいと思うところである。

ルートヴィヒ・リヒター(Ludwig Richter)は彼の回顧録の中で、1828年から1835年までの7年間を過ごした、絵のように美しい古都市マイセンを描写し、最後に次のような嘆きを付け加えている。「近代文化は、調和した姿の中にいろいろなかん高い、煩わしい不協和音を持ち込んだ。それは芸術家の目から見れば、モーツァルトの賛歌の途中で耳をつんざくような汽笛の音が響いているような感じを与えるものである」。実際には、この言葉が書かれたころから、事情はむしろずっとひどくなっており、ドイツでは、このような描写が当たっていないといえるような場所が少なくなっている。この描写は今日では、ほとんどの都市について、むしろ穏当すぎるものといえるだろう。極度に対立するものを一緒に並べる無理解、冷淡な傍若無人さは、北ドイツでとりわけやりきれないものを感じられる。ここでは粗レンガ造り⁷が、建築業学校によって次々と育成され、今や流行病として都市や地方に蔓延しており、その色効果のどぎつさによって、古いものと新しいもの不調和を際立たせている。ブラウンシュヴァイク、ハーメルン、ヒルデスハイム、ハルバーシュタットのような都市は、このことに関する嘆かわしい事例を提供している。これに対してテュービンゲンでのやり方は推奨できるものであり、これを模範としてほしいものであ

⁷（原注）あえて指摘するまでもないであろうが、この近代的な粗レンガ造りの陳腐さは、細やかに組み上げられた中世の魅力的なレンガ造りとは全く何の共通性もない。

る。この町では市役所が、町の古来の部分に、その様式や周囲との関係から周辺地域の統一的性格を損なうような家屋を建ててはならないという原則を徹底させたのである。

周知のとおりプロイセンではつい最近まで、帝国全体の建造物遺産やその他の文化遺産の管理の業務を、ただ一人の人物に委託していた。今年になってやっと、プロイセンのそれぞれの地域について特別の保存官が任命され、また地域の委員会が設立されるようになったが、これは喜ばしい進歩である。ただしそれは、公的所有のもとにある建築物や物的対象にのみ該当することであって、その点ではこのような対策には大きな意味はない。ブラウンシュヴァイクのコールマルクトにある「シュテルン」⁸は、私人が所有する美しい、威厳のある中世の家屋で、維持管理が行き届き、その状態も優れているものの一つであった。数年前、ある建築投機家が所有者と土地売却の交渉を行ったのだが、噂によれば交渉成立の見込みもあったようである。これに対する町の教養階層の憤慨はたいそうなもので、富裕な人々はこの建物を買い取って救済するためにかかなりの額を工面したのである。しかしこの投機家の提示した額はもっと高いもので、この古い「シュテルン」は、エレガントだが押し付けがましい大きな新建築物に場所を譲らなければならなかったのである。まさに掛け替えのない祖国の財産が今日に至るまで保護されないままになっていること、前時代の貴重な遺産を、それが私有になっている場合も含め、軽率な破壊や改変から守る（強制執行やその他の形態も含む）ための法律が存在していないこと — これはまさに前代未聞のことではなかろうか。

上に述べたザクセン地方委員会の公示によれば、記念建造物とは、民俗の歴史に対する理解を形成し、郷土愛や祖国愛を強めるよすがとなる貴重な遺産をいう。そこでまず対象となるのは人間の手による記念物である。しかし記念物という言葉は、同じように、自然景観の形成にも適用される。これは芸術遺産と相まって、我々の国の伝統的な全体イメージを規定するものである。人間による記念物と同じように、自然景観は民族の精神的共有物であり、ひとたびそれが衝動や刹那的な見せかけの利益や個人の小さな欲望の犠牲になることがあるとすれば、永久にそれに代わるものは生まれてこない。このような貴重な遺産を、現代の物質主義の無思慮によってそれが常にさらされている危険から遠

⁸（訳注）ブラウンシュヴァイク市内に現存する金星館(Haus zum goldenen Stern)を指すと思われる。この建造物は、大規模な木組み建築の建物であったが、1894年に取り壊され、石造の建物に変わった。

ざけること、若者に、これらの遺産に対する崇拜と愛情を侵すべからざる聖域として呼び起こし、それを培ってゆくこと、これこそが、花火や花づなや、今日、愛国的祝日が過剰なくらいに祝われるときのあらゆる美しい言葉よりもすぐれた、郷土愛・祖国愛の促進方法である。それが、今日の統一された祖国を築いてくれた偉大な英雄的人物たちへの真の「敬意」であり、このほうが、キフホイザーやポルタ・ヴェストファリカ⁹のようなところに銅像や石碑を建てること（これは、趣旨は理解できるにせよ、全く無趣味なことである。こういうところではこのような記念物は似つかわしくないし、その場所の深い詩的な荘厳さを損なうものである）よりも有意義であり、実り多いものである。

北ドイツや南ドイツにおいて、農地統合によって景観が破った深刻な変形については、すでに述べたところである。このような農地統合には共有地分割が付随してくる。それは、牧草地とともに羊飼いや羊の群れも消滅させ、美しく生氣に満ちた田園的な原初の風景も破壊し、自然に沿った牧畜に代わって不健康な畜舎飼育を定着させるのである。

すでにホフマン・フォン・ファラスレーベン(Hoffmann von Fallersleben)が次のように嘆いている。

そして冬は過ぎ去り
 そして夏が終わった
 そして故郷への熱い思いが
 再び私の中に募ってきた
 でも草原には森の縁で
 羊の群れを追う羊飼いの姿がない
 人々が草原を分けてしまったから
 すべての茂みやすべての木を。
 そう、人々はこんなにしてしまった！
 すべては荒野と原野になった！

これが彼らの仕打ちであり、それは今日もなお続いている。それは、自然な生

⁹ (訳注) キフホイザー記念碑(1888-97)とポルタ・ヴェストファリカのヴェストファーレン州立記念碑(1896) は、ともにヴィルヘルム I 世とおよびビスマルクに捧げられた記念碑群である。(大原まゆみ：ドイツの国民記念碑 1813 年 - 1913 年。解放戦争からドイツ帝国の終焉まで。東信堂 2003 による)

活の詩情や魅力をことごとく排除してしまうだけでなく、地域住民¹⁰の落ち着いた生活と素朴な安心の維持のための助けとなった、心優れた人物たちをも駆逐しているのである。さらに森林償還¹¹も同じ類の事柄であり、これも地方住民の社会生活に深く関わる、重大な影響を及ぼしている（このことをここで述べることは省略するが）。これらのことがらすべてが景観にどのような影響を与えるかは明白である。造花が決して本物の花になることがないように、植樹による森が実は森ではないように、自然、ないしは民衆の直接の活動（これも自然である）によって作り上げられたものはすべて、人為的な方策によって作り出されたもので置き換えることはできないのである。道路や境界を伴う地所の形成もまた歴史的な自然形成物である。そこではあの民衆の本能によって実に賢明なやり方が行われているが、これとは逆に、机上の作業によって水路や土地が信じがたいほど愚かな扱いを受けている。事柄を全体的な広がりの中で理解するためには、このことを直に見ておかなければならない。しかし森林補償 — このことの影響は、新しい人工的な境界線以外にも、森林の量的減少という現象となって現れてくるが、それは他方、社会関係において、対象集落の貧困化や弱体化の原因にもなる — は同時に、近代的森林経営において、一つの関心以外のあらゆる配慮を排除しようとするかに見える志向の現れでもある。森はその収穫とともに、商品に成り下がってしまう。森は一つの資本以上のものではありえず、その活用度を最高度に高めることが主眼となる。こせこせした土地の活用、森の中のすべて空き地や草地（ここはひっそりと咲く花や昆虫がいる魅力的な野生動物の集合場所になる）の消滅、木材搬送のための道路の極度の多さ、遠くからも見える営林区の境界、不幸にもいわゆる「森林の雑草」のブラックリストに載せられた木や林の容赦ない一掃（これらは部分的には、木材産業の再興に大いに役立つかもしれないのに） — これらはすべて同じ源泉を示しているのである。またこの類の現象は他にも多数ある。しかし金銭的な見方に左右されていることが最も切実に感じられるのは、実際に古い森林部分の死滅という点においてである。つまり輪伐の周期がどんどん短くなってい

¹⁰（原注）田園生活の荒廃とそこから生じる危険性について、ハインリヒ・ゾンライ (Heinrich Sohnrey)は、彼の著書「国家における田園住民の意味」の中で優れた発言をしている。

¹¹（訳注）森林償還(Forstablösung)。森林補償(Forstabfindung)ともいう。森林の共通の利用権（薪をとる、牧草地として利用するなど）を住民から取り上げたうえで、その利用者に金銭ないし土地の形で補償を行うことを指す。

るのである。このような巨木の世界とともに、森の本来の素晴らしさや崇高さが葬り去られてしまうというだけではない。樫という木の力強い働きと切り離せない民族固有の建築様式にも、これによってとどめが刺されてしまう。また同時に木材産業、とくに家庭に関連する木材産業からは、自然の基盤が完全に奪われてしまうのである。そしてそれに代わって何が出てくるのであろうか。それはまず第一にボール紙や紙である。たとえばハルツ山地では、広葉樹林は次々とトウヒにとって代わられる。トウヒの密集した木の群は、短い成長期間の後伐採され、「ボール箱工場」に売却され、ボール紙や紙に変るのである。このおかげで我々は、一個ずつ特別な箱に入った石鹼や 250 グラムごとに箱に入れた卵パスタを買って帰ることができたり、われわれのごみ箱を毎日、あらゆる紙製品（極薄のものから厚地のものまであらゆる種類の包装材、印刷された便箋用紙や封筒、豪華な通知状、招待状、祝い状、読みもしない絵入りの宣伝カタログの冊子。これには、本といった方がよいようなものもある）でいっぱいにすることができたりするという恩恵に浴するわけである。半ば厭わしく半ば滑稽な過剰さの積み重ねである。ただし、製造することで富を得る工場所有者諸氏には過剰ということはないし、国の財布にとっても過剰ということはない。というのも国はその森林をできる限り早くできる限り多くの現金に換えることができ、同時に傘下の大工場の税金も手に入るという、二重の利益を得ることができるのだから。

それでも、先に挙げた役所のやり方は、ちょっとだけ旅をしているような人間にはほとんどわからないくらいに、ゆっくりとその破壊作業を進めてゆく。これに対してそれ以外の、どんな鈍感な人間にも目に入ってくるものがらもある。ヴェーザー山地のあるところで、一人の営林署長が最近、山の稜線を彩っている立派なドロマイト岩塊をすべて、ある株式会社に売ろうとした。この会社は、このドロマイト岩塊を取り壊し、それから畑の肥料になるトーマス鋳滓粉を製造しようというのである。幸いにも、上級の役所がこの計画をやめさせた。現在もこれと同じ、ないしは類似の投機家が別の場に姿を現わしている。それは、残念なことに私有地になっていたり、いわゆるリップルド洞窟（これは中世初期には、その分岐や通路を利用して城のような隠れ家に仕立てられたものである）という岩の連なりが危機にさらされていたりするところである。この唯一の、歴史的に重要でかつ景観的にも魅力ある場所の破壊をくいとめることができるかどうかは、まだわからない。

ザクセンスイスの岩石地域、とくにエルベ河畔が採石作業のために被ったひどい荒廃は有名である。この地ではほとんどいたるところで、砂岩を切り出す

ことができる。したがって、景観が大きな被害を被らないような採石場所も多数あるのである。しかし採石場所の決定要因となるのは、搬送の容易さ、見込まれる金銭的利益の大きさである。ライン河左岸、レマゲンの対岸あたりでは最近、玄武岩塊に手がつけられている。この山々の素晴らしい稜線はジーベンゲビルゲの稜線と相まって、ボン地域から見ると、ひとつのまとまったイメージを作り上げており、ドイツでは唯一のものである。既に現在、碎石の痕跡がこの素晴らしい輪郭を傷つけ始めている。しかし、最悪の事態を避けるだけの時間はまだあるはずである。これに比べれば、ネッカー渓谷の採石は、好ましいかたちである。採石作業によって、眺めの美しい、自然のままに出来上がった岩のかたちや山の輪郭は損なわれていない。採石はほとんどが、差し障りのない地域で行われている。ここでは採石場は、放置されて風化すると、渓谷の壁面の印象をむしろ生き生きとしたものにすると思われる。もちろん採石場の数は現在すでになりのものになっていて、ほとんどこれ以上増やしてはならないだろう。そうしなければ、たえず景観に損害を与えることになる。

鉄道が犯した自然に対する無数の蛮行のうちで最も無責任なものの一つは、フライブルクの地獄谷(Höllental)でなされたものである。今日でもこの渓谷の急斜面は素晴らしく密生した森におおわれており、せり出した部分の岩や城跡はたとえようもなく美しいものであるが、この渓谷がつくり出す壮大かつ孤高の詩情には、蒸気機関車の蒸気は似つかわしくない。レール軌道を支えるために建設されなければならない巨大な石の堤防、煙で真っ黒になったトンネルの穴、送電線を取り付けたむき出しの電柱、これらすべては止むことなく景観を破壊し続ける。そこでは、かつてこの素晴らしい渓谷に漂っていた気分をそのままに感じ取ることはもはやまったく不可能である。

ドイツにはかなりの数の新旧の美しい石橋があるが、残念ながら少なくとも同じくらい多数の鉄橋もある。鉄道橋やその他の鉄橋であるが、これらはほとんどすべて見苦しいものである¹²。これらの鉄橋は、たとえそれ自体は優美なものであるとしても、それだけで、多かれ少なかれ、その周囲の景観を消し去ってしまうに十分である。たとえばドレスデンの上流がそうである。ここではエルベ河畔が数十年前から巨大な鉄の棒の塊で結ばれており、それはロシュヴィッツの斜面のほとんど半分ほどの高さに達している。しかし最も残酷な効果

¹² (原注) 鉄道橋で建設してもよいのは、そのアーチ形状が渡河地点のレベルの下に収まるものだけである。たとえばコブレンツの鉄道橋のように、一つ一つのアーチが緩やかに突き出しているものはどうにか容認できるが、それを越えるものはどれも容認できない。

をもたらしているのは、二つの巨大な石柱に支えられて、地獄谷の側面の谷の入り口、地獄道のところでラヴェンナ溪谷への架橋になっている、あの巨大な鉄の箱である。もちろんそれ自体は、驚嘆すべき技術のなせる大技である。しかし、この不格好な代物がこの場所で醸し出す類例のない醜悪さが、こともあろうに写真に撮られて、すべての食堂やすべての美術品店のショーウィンドウにぶら下げられているのを見ると、言葉を失ってしまうのである。大規模な蒸気ビール醸造所やその他の工場をそのまま手本にして、その広告板には、工場の建物や煙突のあらゆる見苦しい姿が、その工場によって台無しにされた哀れな景観を背景として、いい気になって幅を利かせているのである。それは不格好であればあるほどいいのである。地獄谷鉄道については、その利便性が、それがもたらす被害と釣り合わないだけに一層、それに対する憤懣や悲しみは当然なものとなる。詩情や美観が損なわれるというだけではなく、それ以外の点についても事情は同じである。この土地の良識的な人々に聞いてみればわかることだが、政府の許可は基本的に、自社製品が都合よく売れることを期待する、ノイシュタットの二つの企業の強烈な圧力に屈して出されたものなのである。しかし新しい交通手段がもたらす急変のもとで、地域住民の所得状況は苦悩している。新しい交通手段は旧来の交通手段を衰退させ、森の多い地域での木材の搬送に携わってきた搬送人たちや、それに関連する鍛冶屋などの職人たちのパンを奪ったのである。古いポスト通りは、数百年前からシュヴァーベンからライン地方への交通の経路となってきた。今は人氣も少ないが、かつての地獄道(Höllsteig)の宿駅の立派な厩舎は、そのたいへんな賑わいぶりを物語っている。現在、この通りが荒廃している。15世紀前半以来、往来の中心地となってきたその立派な食堂は、かつては冬も夏も、健康で民族色豊かな生活でいつも活気にあふれていたのだが、現在では、鉄道の列車は通り過ぎてゆき、その稼ぎは暑い月に夏季ペンション宿泊客や旅行者の群れがもたらすものに限られている。使用人や下女たちも得られなくなっている。というのも、収入や娯楽にひきつけられている若い人々は、都市での工場労働の道を求めるからである。少数の人間の利益のために自然な生活形態 — このような生活形態は、社会全体の一人ひとりが自分自身について責任を負うというもので、つまりはそれ自体、資産の適切な配分に配慮したものだだったのである — が人為的に排除されている。現在、世の中の全体状況は、急激で過度な大工業の発展によってもたらされた、不幸な形で入れ替わった資産関係の圧力に苦しんでいる。鉄道路線が向こうのドナウエッシンゲンまでの延長されることになれば、それが実際にどんな結果になるかが明らかになるかも知れない。それは必要なものだったと

か、東西の結合のためにそれ以外の路線を選択することはあり得なかった、などと主張できるものは誰もいない。

最近になって自然の美しさを脅かしている一つの危険は、自然の水流に手をつけ、それを電力として利用するやり方が、ますます広がっていることである。ハルツでは数年前、滝をともなって溢れるように流れるボーデ川を、ロストラッペ (Roßtrappe)の上の方で一定の長さで迂回させ、渓谷の出口のところの谷を水力による電気で照明するという計画が持ち上がった。このような小さな町で夜の散歩を楽しむ少数の住民 — それがクヴェードリンブルクやブランケンブルクのような町であっても同じことである — が鉱油ランタンで照らされた所を歩くか、電気照明の所を歩くかなどという問題は、まことに取るに足らない事柄である。せいぜいのところ、電気照明は、その冷たいエレガントな明るさで、伝統的な街路の和やかさを打ち消す効果を持つだけで、その不快さは油や鉱油以上のものである。進歩を欲しがらる町の住民にこのようなことを説得しようとしても、それはむなしい努力になるであろうが。それは、1万人目の住民とか10万人目の住民が出たといって喜ぶことが、子供っぽい刹那的な喜びでしかないことをわからせようとしても、無理なのと同じである。このケースでは幸運なことに、物のわかった人々の憤慨は強力かつ声高で、この俗物たちを黙らせ、まことに無価値なことのためにロストラッペ渓谷の野趣あふれる魅力が失われるのを食い止めることができた。

これと似た、しかしこれよりももっとものすごい計画が、現在、数人の南ドイツの技術者や企業家の頭の中を駆け巡っている。ラウフェンブルク (Laufenburg) 付近の力強い急流地域、シャフハウゼン (Schaffhausen) の下流数マイルのところを、まさに、電源開発に利用するのだという。そしてこの目的のために、あのライン川の流路を変え、その水を水路で呼び込もうというのである。ラウフェンブルクを一度でも見れば、ドイツにはこのようなすばらしい魅力をもった街の景観はあまりないことがわかる。それは急流の岸辺に間近なところに、岩石の地盤の上に高くそびえている小都市で、中世的な性格に貫かれている。物見の塔、宮殿の塔、ゴシック教会があり、その足元には、エメラルドグリーン of 若々しいライン河が荒れ狂い、ごうごうと音を立て、しぶきを上げながら、岩礁の割れ目を通して深みに落ちてゆくのである。今のところ、二つの会社が、それぞれに異なる企画を掲げてバーデン政府と掛け合っているが、このどちらも、その計画の実施の許可を獲得することには成功していない。決定的な局面では、責任の感覚がこれからも発揮されて、この人類に対する犯罪と呼んで差し支えない行いをやめさせることができると期待してよいのだろうか。

もう少し小規模ではあるが似たようなことが、シュヴァルツヴァルトの南部でも、残念ながらすでにかなり行われている。ちょうどラウフェンブルクの近くに大きな工場があり、その建物はライン右岸から全体的風景の美しさの中に見苦しい不調和をもたらしているのだが、最近この工場がのどかな森の谷に手を加える許可を得たのである。その小川は、岩を通り抜けて急速に山を流れ降り、魅力的な滝になっているのだが、その小川が一時間ほど上のところで迂回させ、谷を干上がった状態にしようというのである。あるラウフェンブルク住民が語ったところでは、増税のためにドイツでの売上げが困難になっているスイスの企業家たちが、ライン河のバーデン側を買い上げてそこに工場を設置し、節税を図ろうとしているのだという。そしてお人好しのドイツの市町村は、これで幸運が転がり込んでくると大喜びしているのだという。これら市町村は、一つの工場を近隣に誘致するためにあらゆることをしており、何年にもわたって税金を軽減することまでしているという。この住民はさらにこう言っている。「そうならば少女たちも少年たちも、もうどこへも女中や下男の奉公に行こうとは思わないだろう。だらしのない生活を覚え、昼間に工場で稼いだ金を夕方には浪費するようになるだろう。しかしわれわれのところには、金を持って来てくれる観光客は多くない。だから人々は工場ができることを望んでいるんだ」と。こうなるのは当然のことである。鉄道ができて以来、彼らの目の前で見せつけられる、世間一般の近代的な楽しみに加わり、その分け前にあずかることができるのだから。鉄道はこの種の欲望をそそり、田園の生活の素朴さと自足性を破壊し、小規模な商取引に残っていた仲間意識の中に、都会のめまぐるしい競争の毒を持ちこんだのである。

誰も、高度な条件に配慮した、農産物や自然の力の合理的な活用をやめさせようなどとは思わない。それと同じように、人類ないしは個々の国家に、鉄道や電気や工場の導入をやめるべきだと要求するのも、愚か者のすることだろう。しかしそれも事情によりけりである。これはすべて、容認する程度の問題である。森林を開墾するのは、リール(Riehl)がかつて論じたように、一定程度までは進歩であり文化であるが、この程度を超えると、それは野蛮な行為になってしまう。そこでは逆に、保護し種をまくことが文化となる。絶対的な進歩と誤解されている展開があり、それがいわゆる近代の成果を示すものということになっているが、これについてはまさに諸刃の剣の状況にある。全体的状況を概観してみれば、転換点ははるか前に越えられてしまっていることは明らかであり、現在の社会的展開に現れているマイナスの結果の方が、プラス面をはるかに大きく上回っている。この見方に反対できるのは、大きな眩しいランタンを

じっと凝視し過ぎて目が愚鈍になってしまっている人間だけである。人々は節度も抵抗もない一面性で、強大な動きのなすがままになっているのだが、この一面性は、数十年たっても変わることがない。しかしここで一度立ち止り、思いを巡らしてみよう。そして身の回りに打ち捨てられ、踏みつけられて地面に横たわっているものに目をやってみてはどうだろうか。

広域交通のためのドイツの大鉄道路線網（これは実際のところなくてはならないものだが）が出来上がって以来、多くの支線が建設されてきたが、多くの場合その価値は疑わしいものである。今の時代に新しい鉄道を要望することは、緊急の場合においてのみ行われるべきことである。つまりそれは、真に切実な必要性がある場合であって、今日いくつかの地域で起こっているような、競合する交通機関がすべて閉鎖されたために緊急の必要性が出てくるというような場合である。しかしそれは、誰か個人の利益になるような、物質的利得の可能性をあてこんだものであったり、あるいは思い込みの交通の必要性やばかげた快楽欲求を満たすためであってはならない。

鉄道建設に関して経済的な観点以外の観点がまったく顧慮されないことは、現代の災いである。このような問題やあらゆる類似した問題の決断において、とりわけ工場に関わるあらゆる問題については、社会政策的・社会倫理的観点が何よりも重視されなければならないのだが。現在ますます工業施設が増えていく地域にその本来の、文字通りの意味での田園的性格を維持したり、ないしは再び取り戻すためには、とくに特定の地帯、たとえば大都市に近接したところでは、工場の建設は制限されなければならない。このような改革によって、最上位に置かれるべき倫理的な要求はもとより、それと同じくらい重大な美的な要求（大多数の場合、実際にこの両者の区別をつけることはできない）にも同様に対応できると思われる。

こうすることで大方の目的は達成され、不可欠の前提条件の一つは充足されることになるが、しかし最も重要な点は他のことがらにあるのである。工場の操業は、そのような方法でしか生産できないようなものに制限される必要がある。それが実現しない限り、我々は再び健康な状態に戻ることはできないであろう。それ以外のものはすべて、それらを完全に作り上げるには、趣味性や芸術的形成、個性化、つまりは自由さを付け加えること（目立たないものであっても）が必要になるのであり、このようなものは手作業のみの取り扱いに戻さなければならない。なぜなら本来的に、それには手作業だけがふさわしいからである。これらの分野で工場が広がることによっていい加減な仕事を中心を占めるようになったこと、またこれからもそうなるに違いないことは確実である。

そして、手工業的な製造のみがこのような品物に本当の価値を賦与することができるというのも事実である。なぜなら手作業による製造は、生きた人間の手、生命をつくりだす人間の手の痕跡を感じさせるからである。これに対して機械が作り出すのは、生命ではなく死んだ陳腐な製品であり、それはあらゆる趣味の涵養を破滅に追いやるものである。しかしこの問題の意味は、このことよりもずっと大きな広がりを持つものである。というのも、人間本来の能力が機械によって奪われると、労働者から労働の喜びそのものが失われてしまう、という最も深刻な問題がそこに含まれているからである。しかしこのような労働の喜びはそれ自体、人間本来の生きる糧である。日々の仕事を無関心にあくせくとなしている工場労働者の場合がそうであるが、人間から労働の喜びを奪ってしまったら、そこに残るのは殺伐とした稼ぎだけである。そしてこのような人間は、失われてしまった労働の喜びの埋め合わせを、職業生活とは違うところに存在する享楽に求めるのである。このような事態にともなって生じる道徳的危険性がいかに大きいものであるか。何があろうとも墮落することなく、頭脳と精神を高く持ち続けるには、いかに大きな個々人の道徳的な力が求められるか。これについては説明する必要もないであろう。現代の生活のどこを見ても、驚くような事例が出てくるのである。輝かしい基盤を持った手作業がなすすべもなく没落に追いやられるのを、どうして何十年も気楽に見ていることができたのか、考えてみてほしいものである。その結果、工場制度の中で、その本性において極めて危険な生き方が途方もない勢いで広がったのである。その中にはどうしても避けられない部分もあるには違いない。それを容認しなければならぬというだけでも、十分ひどい話である。このことへの治療としては、ものごとを根本的に変えるしかないのである。ところが我々は逆に、フランス人やイギリス人と組んで、こちらの安い、機械による無価値な工場生産の模倣品や、暖かみのない人工的なアニリン染料や、その他、我々が自慢にするあらゆる偽物を売り込むことで、オリエントの素晴らしい手織物やモロッコの手作業による金属加工品を根絶やしにすることに力を入れているのである。我々は今のところ、残念ながら、この点についての正当な理解には程遠い状況にある。それどころか我々は、遅れた国民に進歩の恵みをもたらしていると称しているのである。しかし最後には、このことがらの本質に基く真実が、正しい見方として勝利を収めるに違いない。逆転への唯一の希望はここにある。そうなれば、人間の能力の価値が再び正当に評価されるようになるであろう。逆に今日では、機械は人間の力を次々と不要にすると称しているのだが、所得の分配は再び広い層にわたって行われるようになり、物は少なく高くなっても、再び良質

の、長持ちする、美しい加工のものになるだろう。そして我々は、現在の生活にいやというほど氾濫している、誇張された無内容な正確さがもたらす混乱から解放されることだろう。

W.H.リール(W.H.Riehl)はその古典的著書「国と人々」の中で述べている。「森の擁護者が経済的な理由だけから現在の森の範囲を維持せよと要求するとしたら、それは消極的な防御にすぎない。少なくとも、社会政策的な理由も同様に重要なのである。人間はパンのみにて生きるのではない。仮に我々が木材をものは必要としないとしても、我々は森を必要とするのである。我々が外的な身体を温めるために枯れ木を必要とすることがもはやないとしても、人間にとって、緑の、生きた木は、内的な心を温めるために、ますます必要となるのである。現在の森の村落には、我々の民族の原初的な礼節の残滓が、その影の側面においてだけでなく、その自然そのものの輝きの中で維持されている。森林地域だけでなく、砂丘、湿地帯、荒野、岩や氷河の地域など、すべての荒野や原野は、開墾された畑地になくってはならない補完なのである。民族がその力を發揮してゆくためには、一つの民族の中に多様な展開が同時に存在していることが必要である。教養の中で洗練され、繁栄の中で飽食している民族は、死んだ民族であり、それはサルダナパール¹³のように、その栄光とともに身を焼きつくすしかないのである。学問のある都会人や肥沃な穀倉地域の肉付きの良い農夫は、現在の人間かもしれない。しかし貧しい湿地の農夫や、粗野で武骨な森人は、まさに未来の人間である。君たちが社会を、精神的教養の均質的な普遍主義によって平均化したいと思うならば、森を開拓しつつ、山を平たくし、海を閉鎖するがよい。一つの民族が森の奥の住人にいたるまで自らの源流を遡り、そこで、自然で素朴な民族性の新しい力を得ることがもはやできないとしたら、その民族は消滅しなければならない。」

リールが40年以上前にこの言葉を書いた時、彼は次のように付け加えることができた。「ドイツにはまだまだ原生林もいくらか残っていることを喜ぼうではないか」と。しかしこのような短い時間の間に、現代の生活が我々の祖先が残した市壁や街路や家屋にとどまらず、とりわけ原生の自然に対して行ってきた破壊戦争が、どれだけのものを殺戮してきたことだろうか。それも、当時誰

¹³ (訳注) バイロンの詩で知られるアッシリアの王。放蕩の限りを尽くした暴君として知られ、その最期にあたっては寵姫、侍者、財宝もろともみずから宮殿に火を放って死んだと伝えられる。

も、遠くからは予感することもできなかった規模で。やがてドイツの山々や荒地のどんな辺鄙な片隅も、リールが言ったような意味での後背地ではもはやありえなくなるだろうが、このような事態をもたらしたのは決していわゆる「経済的開発」だけではない。それと同じくらいに、今の時代に流行の旅行者・観光客・夏季避暑客相手の商売がこれに与っているのである。あのラウフェンブルクの住民の「観光客か、工場かのどちらかだ」という発言には、恐るべき真実が含まれている。この種の客商売の業者の投資（熱心な市長の支援がある場合とない場合があるが）が行われる結果、どこであろうと、滝や古い森の美しい場所や特徴ある岩石群などは、搾取者たちの欲望から逃れることはできないのである。それにしても、そのためにどのような手段がとられることだろう、そして何という犠牲を払わなければならないことだろうか。

アイヒェンドルフは歌っている。

春の夜がひそかに香っている。

森は岩の端からざわざわと音を立てる。

誰かがそれを聞いているかのように、誰も起きていないかのように。

これが本当なのである。ところがもし、いたるところでうるさい太鼓が打ち鳴らされるとすれば、それは自然という、大勢の観客のために仕上げられた効果的な見世物に他ならならず、そうなれば、この大地の処女的な美しさは失われてしまうのである。このように観光客に見世物を提供するという仕事には、残念なことにたいていは、営林局の協力を得ることもでき、営林局は、それで何か称賛すべきことを行っていると思いついでいるのである。そうとしか考えられない。世界中が彼らの耳に、観光業による恩恵と自然美への投資という、同じ流行歌を叩き込んでいるのである。

近年、ハルツやテューリングゲンの森が大都市からの人々であふれかえり、中でも人気のあるところでは、それに付随するあらゆる厄介な問題を持ちあがったのだが、その頃はシュヴァルツヴァルトはまだ旅行産業にほとんど手をつけられていないように思われたものである。それが今ではこちらでも、いわゆる文化という疫病が最も養分の多い土壌を見つけたのである。それは、すべての芽を出す緑色の植物に付着して病気にしてしまううどんこ病のようなものである。こちらでもドイツの他の地方と同じように、都市、村落、谷、山々は、新聞広告や彩り鮮やかなパンフレットで、滞在地や保養地として売り出している。

またレストランや駅にもこれらの広告が出ている。そこではあらゆる魅力を、素材的、美的、「歴史的」魅力などとして一つ一つ並べたて、数時間の間でも長期滞在の場合でも、いかに快適に、いかに安価にすべてが手に入るかを計算して見せるのである。要するに、その種の宣伝画にはたいてい女たちの絵が描かれているのだが、それらはまったく内容に釣り合った看板であり、この恥知らずな商売の実体をそのまま言い表している。質素な旅行をする人間には質素な旅館が好ましいものだが、ここではその代わりに、いたるところに舐めたようにきれいなホテルがあり、たいていは都会的な「教養ある」主人と都会的な給仕人たちがいて、大切な客が、生活流儀になっている使い慣れた隠語で何一つ不自由しないように配慮している。そしてこれらはみな、既存の集落に接した場所に建設されているだけではなく、ペンションや保養地として、山や山岳湖の、まさに人里離れたところに作られていることもある（万年雪があるところにイギリス人兵舎やローン・テニス場をつくったりしているスイスの事例にならう）。そこにはもちろん、周りにプロムナード式にしつらえた道が巡らされており、休息用ベンチや見晴らし塔も用意されている。城跡についても、そこに飲食店をくっつけることはないとしても、少なくとも旗を立てて「教養ある客層」の感覚に訴えるようにしなければならぬことになっている。最近シュヴァーベンでは、気のきいたことに、ホーエンハーヴェン(Hohenhöwen)の城の城跡の中に鉄製の見晴らし塔まで建てて、その竣工の祝賀が行われたが、周辺地域はそれに大歓声を上げたものである。よくあるような景勝地の絵がついたはがきが付き物になっているのは当然のことだが、これらはほとんどが、暖炉にくべるのにちょうどよいようなひどいものである。そうでないものも、捨てるほど悪くもないが取っておくには悪すぎるような代物で、これは、今日の製品の無数のものと同様である。しかしそれを保存するための特別のアルバムがすぐに作られたりする。こうして有望な新しい産業分野が確保されているというわけである。

確かに初めて聞くピアノの響きは、きっと
誰にもありがたく、新しく、うれしいものだったろう
今では、多くの人間がほとんど絶望せんばかりになっている！
ただ流行がすべてをいやなものにしてしまうのだ

週刊雑誌のこの一節は、これらの結構な提供物にぴったりあてはまっている。きちっとはしているがエレガントにこしらえたのではない、自然なものになっ

ている道や、ほどほどに立ててある道標は、山岳地帯でも平地でも確かにありがたいものである。しかしこれこれの見晴らしポイント（そこにはもちろんホテルや飲食店があるのだが）に行くにはこちらの近道をお通りください、そこには快適な、影になった休息場所もあります、などといたるところに、いちいち事細かに書いてあったりする場合、親切心に見せかけて、利益を得たい業者の関心は実は別のところに向けられているのであり、それを信用するとひどい目にあうのである。

観光投資が生み出した代物の中でも最も恥知らずなもののひとつは、ケーブルカーや歯車式鉄道である。これは怠惰な観光客をひとまとめに山頂まで運ぼうというものである。アルプス地方、とくにスイスでこの種の事業が反感を買うのは間違いのないところである。そこでは、ユングフラウの清らかな雪原すらも技術者たちの不遜な計画をもはや免れることができないのだから。その点でいえばドイツではなおさら、山岳地帯の高度がはるかに低いという事情もあり、この種の企てをするどんな言い訳も成り立たない。ドラッヘンフェルス(Drachenfels)やヴィースバーデン近郊のネロ山やニーダーヴァルト(Niederwald) — この麓では、魅力的なアスマンスハウゼンが鉄道設備によって原形をとどめぬほどに変形されてしまっている — に登る鉄道は、ドイツの景観の汚点であり、現在ではさらに、シュネーコッペやブロッケン山に上る歯車式鉄道まで計画されているのである。登山鉄道はどのようなものでも、断固として排除されなければならない。このようなもので喜ぶのは、旅行賤民（社会的な出身階層が高かろうが低かろうが）と呼んで差支えないような一部の連中だけであり、それ以外の人々には何の役にも立たないのである。

もちろん無数の山岳愛好会、旅行愛好会や美化愛好会には、札付きの投機家ばかりではなく、誠実に自然の喜びを感じている人々が必ずいるはずである。そして、このような人々の側では、少しでも美しい自然を救うために、幾度となく顕著な行動が行われていることも、感謝をもって認めなければならないだろう。とりわけハノーファーの山岳連盟は最近、トゥーリスト連盟の総会で、この方向の一つの動議を提出したし、またその会長は、感謝に値する熱意をもって、領有地ハーメルンを農地統合のカミソリから守るべく努力したのである（残念ながら理解は得られなかったが）。またジーベンゲビルゲ(Siebengebirge)のペーテルス山では、ある会社がその美しい稜線を、碎石の設備によって完全に壊してしまう恐れがあったのだが、現在これが維持されているのは、実際のところほとんど、ボンの美化愛好会の努力のおかげである。というのも、同愛好会は、山のいくつかの地点の小さな土地を購入することによって、工業

推進派の急激なやり方をやめさせたのである。このような愛好会が単発的なものに終わらないことを祈るばかりである。またこれらの愛好会が、その具合の悪い名称も含め、許し難いスポーツ的・営業的な「観光業」の機構をすべて放棄し、活動を自然保護、文化財保護、民族伝統保護だけに限定するという決断をすることを願わずにはいられない。これらの愛好会にはこの分野でなすべき仕事がたくさんあるはずである。これらの愛好会が緊密に協力すれば、その成功は疑いなしである。ところが彼らは、個々人が楽しい経験をしたことがあるというあらゆる景勝地を、できる限り取っつきやすいかたちで人々に提供することを立派なことと考えている。そして、利便性のためのあらゆる方策を講じることによって、まさに自然の中にある大切なもの — あらゆる深い人間感情が自由で真正な詩情の息吹を感じるための条件となるもの — を破壊しているのである。城の廃墟では、その壁面の内部や隣に快適な作りのレストランが設けられていたり、滝や見晴らし点のすぐ近くに飲食店や豪華なホテルの建物があつたりするのだが、このようなことは、バーデンバーデンの近郊やそれに類似した、ヨーロッパ中に知られた土地であれば、諦めて我慢もできるかもしれない。それは、リギ鉄道やヴェンゲルンアルプの山頂でのありさまを、仕方のないこととして受け入れるのと同じである。しかしながら彼らは世界中のものに手を加えて、ありもしない悩みを癒すための「療養地」（これは療養地などという代物ではない）とか、大都会のサロンの老いぼれた愚鈍な連中のお楽しみのための豪華ホテル、俗物の群れ（この連中の楽しみは、コーヒーやビールを自然という装飾とともに味わうことなのだ）のための酒場などといったもののネットワークにしてしまうのである。これは、高貴で、強い精神と今なお不屈の情感をもつ国民を傷つける行為である。結局のところ、この連中の凡俗さに太刀打ちできるものなどなく、詩的な親密さにあふれた、あたかも音楽のようなドイツの風景の魅力をもってしても、またイタリアの彫塑的な美しさをもってしても、この種のことを無理に止めたり、破棄させることなどできないのである。ハルツ山地全体を管理の行きとどいた単一の公園に変えることを、大真面目に達成目標にしている人々がいる。しかしローマでも何年か前に、あるイタリア人の大臣が一つの詳細な計画を考えたものである。その計画とは、フォロ・ロマーノからアッピア街道に至る古代遺跡の地域全体を、同じように一つの巨大な公園に作りかえることに他ならなかったのである。

こんなことが本当になれば、そこに足りないのは、ヴェルヴェデーレのアポロが燕尾服にキッド皮手袋というかっこうで登場することだけである。現代の文明化された社会の衣装は、我々が「進歩」を重ねてゆくなかで、不自然さや

無趣味さをどれほどまでに推し進めてしまったかを測る、最も正確な測定器である。敏感にかつ面白おかしく、ジョルジュ・サンド夫人はその小説「アントワヌ氏の罪」(“Le peche de Monsieur Antoine”)の中で、燕尾服を着たパリの流行青年が田園地帯の情景の中にいるという現象を描いている。これもフランス側での似たような心情の表現であって、我々はそれをここに引用しないわけにはいかない。「今日の市民社会の衣装は、流行がこれまでに生み出した最もあわれで不便かつ不格好なものであるが、その欠点と見苦しさはとくに、戸外の野原に行ってみるとよくわかる。大きな町に近いところではあまりそのことには気づかないものである。なぜならこのようなところでは地域そのものが人工的に形作られており、いたるところが直線的に区切られ、植樹や建物や壁などと合わせて統一された趣味で整えられていて、そのために自然からあらゆる自由とあらゆる優美さがなくなってしまうからである。このような高度に合理的に管理された領地では、時にはその豊かさや均整の取れた姿を称賛することもできる。しかし人がこのような土地に愛着を感じるとは思えない。本当に田園的な自然はここにはなく、それは、それほど使いつくされていない、いくらかの野性味を残している地帯にあるのである。このような自然が残っているのは、文化がけちくさい装飾を持ちこもうとしていないところ、神経質に保護された境界が至る所にあるというのではないところ、個人の所有地がせいぜい石や茂みで他者の土地と区切られているだけで、信義という保護にゆだねられているようなところである。道は歩行者や馬や荷車のためだけにつけられていて、そこには偶然的な美しい眺めに満ちており、自然に育つにまかせた生垣は渦巻きになって垂れ下がり、アーチ形に巻きついてあずまやになっていたりする。そこは、豪華庭園なら注意深く取り除かれるはずの、野生の植物の飾りにあふれている。貧しさはおずおずと富の足元に這い込んでいくのではなく、その逆である。貧しさは、微笑みながら自由に地面の上に広がっていく。地面は貧しさのシンボルたちを誇らしく担っている。それは野生の花や草、つつまじやかな苔、野生の苺、遮るものもなく流れてゆく小川の岸に生えるナズナ、何百年も前から道を狭めている岩にへばりつくキツタである。そこには警察が気難しげにあたりを見張ることもない。心豊かな人間は誰も、道を横切るこれらの枝を好ましく思うものだ。そして通り過ぎる人はそれを避けてゆく。湿地の穴では蛙が鳴き声を響かせ、散策する者の注意をひいている。これは、王様の宮殿の前に立っている歩哨よりももっと用心深い歩哨だ。この野原の庭園を取り囲んでいる、崩れ落ちそうな古い壁(誰もこれを取り払おうとは考えない)、地面を持ち上げて、古い樹木の足元に空洞を作り出している強固な根 — この

ようなのびのびとした生の営みが真の素朴な自然をつくりだすのであり、このことが農民のまじめな特性と質素で飾り気のない衣装にしっくりと溶け合うのである。このような無愛想で雄大な景色の真ん中に、人が「旦那様」と呼ぶ寄生蠅のような人間 — 黒の装束に身を包み、その顎は剃り上げてあり、手には手袋をはめ、足はぎこちない — を登場させてみるがよい。世間では王様気取りのこの男だが、ここでは、滑稽な場違い人間、全体の景色の中のアつかましい汚点でしかない。この明るい日の光の中で喪服を着てどうしようと言うのか。イバラのとげは、格好の獲物がきたとばかりにこれをからかっている。あんたたちのうとうしい、不釣り合いな装束はここでは、貧乏人のぼろ着よりも哀れに見える。感じとして、あんたたちはこの爽やかな空気には似つかわしくないし、その召使いの衣装はあんたたちを台無しにしている」。この機知に富んだ女性が自転車や、今どきの「自転車をこぐ」ご婦人がたのこことを知ったら、何と言ったことだろうか。

少し前にドイツ日日新聞は書いている。「我々の古い民族衣装や身分衣装には、ドイツの独自意識、身分意識、能力意識のいい部分が隠されている。またかつては実際にそうだったのである。こうした意識も、衣装が消えてゆくと同時になくなってしまった。慣習や衣装が今も維持できるのであれば、民俗を愛する者はみな、これらが衰退したり消滅したりすることがないように努めなければならない。都会では平均的な作法や月並みな品物が圧倒的に幅を利かせるようになった。このような事態は、田園地帯ではまだそれほど根づいてはいない。したがってこのような地域では、この新しい事態を打破することは可能であり、そうしなければならない。この事態を打破することを真剣に考えるいい機会である。この都会的な作法や品物は、農家や領主の館でも跋扈して、その独自性を駆逐しはじめている。何十年か前にはまだ、気取った恰好の地主は人々の笑いと軽蔑の種になる現象だった。今日では、袋のような形の上着、つま先がくちばし状の靴、息がしにくいほどきつい襟とチェーンの腕輪といういでたち(まるで案山子のような恰好であるが)で耕地をもったいぶって歩く地主たちも、決して珍しいことではなくなっている。

古い城の内部調度が建物の精神に忠実に対応していなければならないというのは、これまではまったく自明とされていたことである。今日我々は、古く気品ある美しい建物(その華麗な丸屋根と荘重な壁面が現代のがらくたへの冷徹な抗議のように感じられる)の内部に、芸術性も才気もないありとあらゆる家具が寄せ集められているのを見ることがある。それは押しつけがましく、派手好みのセンスをそのまま表していて、がらくたの古道具屋を思い起こさせるよ

うな代物なのであるが、このようなものが今では、現代的なものを受け取られるのである。このことは農家においてもまったく同じである。父親の古い衣装は新しい万能着に代わってゆく。教会コートは「フロックコート」に代わる。女性の衣服についても、真正なもの、優れたものに代わってまがえ物、模倣物、ふざけたものが出てくる。古風な晚餐服に身を包んだ農夫は、品格ある、威厳をもった存在である。これが大都会風のおしゃれ着や普通服に代わると、農夫も品格ある雰囲気にはならず、滑稽なものになることもしばしばである。固定した椅子とがっしりした長持ちなど、農夫の力強いセンスをあらゆる調度品がある古い農家の居間は、堅実で素朴な印象を与えるものだった。それが今日ではあちこちで、しみつたれた二人掛けソファ（こんなものに座ると、背骨が曲がるのが心配になる）や張り合わせ布の椅子も普及しているが、このように腰掛けるのは、いくらか体重のある男性には勇気のいることである。人々は都会人のやることを模倣しなければならないと思ひ込んでおり、愚かにも、自分が都会人の生活に近づけないことを何か卑しいことのように考えているのである。特性のない、十把一絡げの、血の通っていない陳腐なものが、進歩やいわゆる教養の現れとみなされ、模倣の対象になるのである。このような古い慣習や衣装が道徳的な豊かさを内に秘めていることや、都会的な没個性が哀れむべき心の貧しさの現れであることを、この国の人々みなが認めてくれればよいのだが。民衆の精神生活が貧しければ貧しいほど、彼らの外面的生活はみな似たような形になるのであり、この逆もまた然りである。しかし問題はそれだけではない。慣習や衣装の独自性が失われていることは、精神的な貧困化の象徴であるばかりではなく、身分的名誉の消失や身分的な喜びの忘却を表すものである。この国の人間で、その素晴らしい身分に喜びを感じ、今の自分を誇りに思っている人は、自分を外面的に他と区別しているものを守ろうとするものである。このような人にとって、これまでと違う衣服や振る舞いを追い求める傾きは、異質なものであり、軽蔑すべきものと映るだろう。その身分の伝統的な独自性 — 慣習や習慣、衣装と仕立て、家財道具や家の装飾品 — を守れという警告は、一見して思うよりもずっと重要なものであり、その影響も大きいものである。誇りを失った身分、自らに何の喜びも持たない身分は、凋落してゆくのである。したがって身分の誇りのしるしを守り、身分の意識を持ち続ける人間は、そのことによって身分の凋落を食い止めることができるのである。

これに一言だけ付け加えるなら、従来からの「農夫」(Bauer)という、それ自体当を得た呼称も評判が悪い。手紙のあて先に「農夫」という語を書いてはならず、「農地所有者」とか「農業経営者」とかという空疎な表現を使わざるを得

なくなっているのである。

このように、自然発生的なものや健康なものは、どのような姿のものであれ、時代遅れなもの、価値のないもの、遅れたものとして排除され、お払い箱にされる。今日の社会はあらゆる活動によって、このことをうまく成し遂げたわけである。しかしこの、最先端の流行を追う同じ人々が、現存する民衆の伝統の刺激的な部分を一度耳にするや、この自然発生の見物をどうしても見ておきたいと、再びいてもたってもいられなくなるのである。オーバーアマガウの受難劇は、深い敬虔さから生まれた民族芸術の名残を現在にとどめている、美しく感動的な演劇であるが、この催しは今や、あらゆる国々、あるいは世界中からやって来る、好奇心に駆られた人々の参集地となっている。そして今、一つの場所でこのような餌食に十分な効果があることがわかると、今度はボヘミアの森でも、このような素朴な宗教心を相手にして、似たようなやり方で商売ができるかもしれないなどと考え始める人たちがいるのである。オーバーアマガウでは、聖人たちを演じる役者たちは、ミュンヘンの俳優のところ弟子入りして準備しており、また観客の好奇心やその他の上流社会の要求を最大限に満たすことができるためのあらゆる方策が講じられている。しかしこの素朴な民衆信仰の素晴らしい精華は、このような世俗化の素材になるためだけに、現在にまで生き残ってきたのだろうか。そうだとしたら、それが、忘れられそうになりながらも、時の移ろいに耐えて生き延びてきたことによって得られたものは何だったのだろうか。そもそも世俗化とは、そのことばの本来の意味からして、全キリスト教世界にとって今日もお最も神聖なものとなっている出来事の演劇的な表現である。そのためには、このような上演が祈りの必要性から生まれたというだけではなく、それを演じる人にも見る人にも、礼拝として感じ取られることが条件となるのである。実情がそうなっているかどうかは、まったくけがれのない、素朴な民衆の観念という前提があるかどうかにかかっている。もちろん政府は、10年よりもっと短い間隔で再演せよとの要望に屈したわけではない。政府はさらにそれに続く策を講じるべきである。すなわち、この演劇の許可を与える際には、プロフェッショナルな俳優を使うことをきっぱり止めるだけでなく、劇の設備に関しても本来の枠組みをどの方向にも逸脱しないようにすることを条件としなければならない。事前の新聞広告や事後のレポーターの記事についても、すべてやめさせることである。観客の参加が、周辺地域の土地住民の範囲を越えて広がることは、負担の軽減にならず、それどころか負担増大になりかねない。世間の喝采や金銭収入の味をしめた後であってみれば、このような措置の結果、この行事への人々の興味が薄れるかもしれない

(さしあたりは心配には及ばないであろうが) が、このようなものがなくなってしまったところで、何も困ることはないのである。このような行事自体に生き残る力がないとすれば、それは無価値なものになってしまっているということである。それが思い上がった連中のお楽しみとしてのみ生き残ってゆくとしたら、むしろ無くなってしまった方がよいのである。

そもそも、辺鄙な場所に暮らす収入の少ない住民を、外からの観光客を増やすことによって援助しようとする (このことを着想・促進しているのが、政府機関、地区役場、あるいは種々の「観光促進」協会 — これらは結婚仲介所と対をなす立派な協会である — のうちのどれであるにせよ) ことほど、重大な思い違いはないであろう。というのも、社会の繁栄にとって、観光を当てにすることほど不安定な基盤はないからである。これらの観光客は、これまでの素朴な状況の中に大都会的な贅沢と退廃を持ち込んでくる。このような要因は、とりわけ、見たことのないものが驚嘆の念を引き起こすようなところでは、その倍も強い腐敗化の作用をもたらすに違いないのである。しかしそれだけではない。所得が不安定になること、そしてまた、物質的・精神的な繁栄という祝福の唯一の基盤をなす、本来的な労働から離れてしまうことは、生活形態の変化に付随してくる危険な現象である。

かつてプロイセンに対して、危機にさらされているヘルゴランド島の砂丘島と海水浴場を維持すべきとの要求がなされた際、ある新聞は次のように書いた。「そうなれば — つまり、暴風雨で政府の努力がすべて無駄になってしまうようなことがあれば — ヘルゴランド島の住民は、彼らが昔営んでいたような生活に戻らなければならなくなる。この時代には、彼らは、観光客がもたらす金以外の収入で生活することを余儀なくされていたのである。かつては彼らは水夫として知られ、素晴らしい魚をたくさんとった。ヘルゴランドのロブスターは世界中に知られていた。しかし今ではこの地に水夫や漁師がいなくなって久しい。今日ここで水夫や漁師といえればそれはカリカチュアに描かれたもので、防水長靴やサウスウェスター帽とセットになった水夫服は偽物である。そしてヘルゴランドのロブスターはいまや、ヘルゴランド産のものではまったくない。ここの住民は皆、怠け者になっているのである。というのもここの住民には、仕事と言われるものは年に6月15日から9月15日までの3ヶ月間しかない。これはつまり海水浴の時期であり、そこでの主な仕事というのは集金のことなのである。」

ヘルゴランドについてはまだしも、その海水浴場は本当の治療になり、体力強化の絶好の機会になるという反論が成り立つ。これに類似したものがある土

地で、とくにもともと療養泉であったところについて、実質的に必要となるものを制限しようとするあらゆる試みは、愚かで不適切なこととして退けられなければならないのは当然である。しかしこのような少数の本当にまじめな療養地が、空気清涼保養地、夏季休養地など、人為的に作り出された観光地での、流行演出の氾濫ぶりを見たら、どう言うことだろう。これらは、作り物の流行欲求を満たし、田舎の住民を都会的な考え方や生活様式の雰囲気に取り込む以外には、何に役にも立たないものである。このようなケースのように、偽善的な見せかけが一步一步破滅に近づき、ついには破滅してしまうさまを、詳しい描写で体験してみたいと思うならば、ローゼンガーターがその感動的な著書「永遠の光」の中に書いている、アルプスの谷の恥辱の描写を読んでみるがいい。

事物や人間を、それにふさわしい場所に残しておくことはできないのだろうか。技術の進歩が人間にもたらした贅沢のおかげで、人間はこんなにまで弱くなってしまったのだろうか。人々は全世界のすべての生活圏を、分け隔てなく、このような贈り物で満たすことを、何よりの緊急の使命だと信じているのだ。そして「富んでいるのは多くのものを所有している人間ではなく、欲望の少ない人間である」という昔の格言など、すっかり忘れてしまっているのである。デルフォイのアポロの格言は、「多くを望むな！」と言っている。しかし我々は、人工的に肥大させられた欲望、つまり、最大のものから最小のものに至るまで、あらゆるものの中にある「過剰」に苦しんでいるのである。あらゆる過剰、あらゆる飽食の後に来る報いが間違いなく近づいているのを、人はもはやまったく予感していないのだろうか。歴史の教訓は、豊かになり怠惰になってしまった民族はすべて没落してゆくということを恐るべき形で説いているのだが、人々はこれをもはや理解できないのだろうか。この民族の一部には、大都市の過剰な刺激や風俗の乱れ（これを避けることは現実には難しい）から離れたところで、厳しいながらも健康的な労働の中で、つまりさまざまな耐乏を学び舎として育ち、力をつけている人々もいる。このような人々がいなければ、どこで生命力が新しく生まれてくるのだろうか。

我々は新発明それ自体を非難するものではない。非難されるべきは、それらを支配する（つまり役に立つ限りにおいてのみ新しい発明を活用する）のではなく、そのようなものに支配される人類の愚かさや欲望であろう。郷土（それが都市であれ田園地域であれ）が再び真に親密なものになるようにひたすら努力すればよいのである¹⁴。そうすれば多くの鉄道はなくても済むであろう。な

¹⁴ （原注）農民の小資産の価値を高めることによって特定の地域を活性化させ

ぜなら鉄道熱の蔓延に効く本当の治療薬は見つかっているのだから。アメリカでは、穀物平原に生まれ変わったプレーリー地帯で、一度に収穫を行うために農業機械が導入されている。これはアメリカでは当然のこととしても、数モルゲンの農地を耕作するだけのドイツの農夫にこのような機械を推奨する理由はない。農夫は長い冬の多くの時間の暇を、収穫した穀物を脱穀しながら過ごしたほうがよい。このほうが、都市の歓楽を手に入れるために鉄道の次の駅までの退屈な時間をもてあましてよりむしろずっとよい。そうすれば彼の筋肉のエネルギーは新鮮に保たれることにもなる。蒸気脱穀機の絶え間ない、神経をいたぶるうなり音に比べれば、脱穀のリズムは心地よい田園音楽である。この蒸気脱穀機ときたら、最近では秋の時期になると、隣人を苦しめるだけでなく、この巨大な機械の音が聞こえる範囲に入れば、歩いている人間にも何時間も先までついて来るのである。我々が物質の盲目的な偶像崇拜者になってしまっていること、今日無数に存在している享楽や快適さの奴隷になってしまっていることを示す事例を挙げるとすれば、すべての生活領域にわたって枚挙に暇がない。

上に行った記述は決して喜ばしいものではないが、しかしそれは現実に沿ったものである。世界は日ごとに醜く、ますます人工的かつアメリカ化されたものになってゆくばかりでなく、我々は、幸福と思ひ込んだ幻影を追い求めることで、同時に、自分たちを支えている土台を絶えずどんどん掘り崩していつているのである。感覚的な快楽を愛の屍と呼んだ人がいる。愛は、人間全体をその心の奥底に至るまで捉えて離さないものであり、人間の最も高貴な力をはばたかせ、最高のもの（その萌芽は人間の本源の中に宿っている）を成し遂げる力を与えてくれるものであるが、快楽はその愛の屍だというわけである。我々

ようという目的による、いわゆる「入植委員会」の開設は、それ自体大いに感謝に値するものだが、そこで純粋に経済的な要素が一方的に強調され、すべての理念的・精神的な側面がないがしろにされているかぎり、これが最終的な成功をおさめることはないだろう。人々に本当にくつろいだ気分させる古い様式の農村家屋を建ててやるのではなく、彼らをモダンな殺伐とした屋根瓦の箱の中に閉じ込めておくとしたら、また多くの土地を得たいがために、この人々の近くにある、農家に影と心地よさを与えることができるかもしれない古い木を切り倒してしまうとしたら、このような人々がいつの日か、郷土へ思いからその地に根付くような、まともな農夫になるとは考えられない。工場や、工場に使われる建築様式が、このような思いを引き起こすことはないのである。人の心は決して思い通りになるものではなく、合理的な模範解答では心を満たすことはできないのである。

の今日の物質主義は、昔の時代の感動に対して、これと全く同じ関係にあるのである。それは、いかに充実しているように見えようとも、死滅の始まりを示す兆候に他ならない。感覚的な指向を持つ現代の爛熟の文化、偽りの文化は、結局のところ、野蛮さ、精神の粗暴化に転化するのである。

このような状態を極めて忠実に反映しているのは、現在の芸術の、無内容でゆがんだ在り方である。その墮落は留まるところを知らず、芸術は商売に成り下がっているのである。そこでは、人間と芸術家は一つのものであるとか、美は同時に善でなければならないなどという考え方は、時代遅れの迷信として嘲笑の対象となる。グスタフ・フライターク(Gustav Freitag)は最近の文学について、「それは、人目を惹きたいという欲求の観点からのみ理解できるものである」と語っているが、このことは、音楽や美術についてまったく同じようにいえることである。とくに大衆を狙ったこのような投資の道具となっているのは、品のない感覚性や世間向けの挑発であり、また醜悪な現実 — それは奇形化した並木だったり、グロテスクな精神状態だったりするのだが — の描写へのこだわりである。オペレッタのメロディーはみな、その歌詞も含め、一見まったく無害なものに見えるが、それだけ間違いなく退廃的な影響を持ち、民衆に道徳的退廃の害毒をもたらすものである。この種の音楽には芯の髓まで軽薄さがしみ込んでいる。登場するのは手回しオルガンや回転木馬であり、また大都会の駐屯地から来た帰休中の兵士、夏の保養客、旅回りの商売人などであるが、真正で純真な民謡は、世の隅々に至るまで、これらのものによって駆逐されてしまう。この種の歌は害虫のように人の心の中に取り付き、巢食うものであり、このような敵対者を前にしては、学校で民謡を歌い継いでいこうという努力は、ことごとく無力なものになってしまうのである。民謡がまったく歌われなくなり死滅してしまうことを望まないなら、この類の歌については、その生命線を絶たなければならない。

今日数えきれないくらい協会や団体があるが、そこには、極めて重要な目的で設立されたものもあれば、まったく無価値な目的によるものもある。このようにおびただしい数の団体がつくられるのだが、そのうちには、人間のためになるものもしばしばあることは事実だが、おそらくそれと同じくらい、取るに足らぬものやただの「クラブ好き」に終わっているものもあると思われる。しかしここでは、ドイツの民族性を守ること、ドイツの郷土（その記念物や自然の美しさも含め）をこれ以上の毀損から保護すること、という目的において志を同じくする者が力を合わせる事が何よりも重要な意味を持つことになろう。というのも我々の力の根源は、他ならぬこの点にこそ存在するからである。こ

れまでのようなやり方を続けてゆくならば、我々はすぐに、命脈の尽きた民族になってしまう。そこでは宗教的感情やそれ以外のすべての感情の力も、枯れ果て、皮相なものになってしまう。このような民族は何の精神的な高揚もなしえず、詩人や偉大な芸術家、そもそも真に創造的な人物を輩出することもできず、空疎な、見かけだけの偉大さを装いつつ細々と生き残ってゆくのがせいぜいのところである。さらにもっと言うならば、我々はまさにこのような一緒くたの平等主義で、赤色の国際主義に力を貸しているのである。この種の祖国なしの状況はほとんど例外なく工場地帯に広がっていることが特徴である。風景の性格や歴史的に形成されてきた性格に内在する、郷土のあらゆる独自性が抹殺され、気質、風習、外観におけるあらゆる民族性や特殊性が失われてしまうとすれば、そして創造的形成のすべての芽 — これらを育ててゆくには、播かれた穀物の種子が大地の静けさを必要とするように、一定の隔離と静寂が必要である — が枯れるに任せられるとすれば、祖国の遺産で特に命をかけてまで守るべきものなどこれ以外にあるはずがない。電気照明の労働者住宅、工場の煙突、ホテル、馬車鉄道などは、現代のローマでもベルリンやニューヨークと同じ様相を呈している。富と快適な生活を求めて猛進すること、文明化された社会では服装や習慣もお決まりのものになってしまうこと、これは洋の東西を問わず同じである。もしも世界でこの先も、このようなものしかないというのであれば、そもそもなぜ、一つの国家が他国に対して設けている障壁を護り通すことに未だに精を出しているのか、という問いも許されるであろう。そうならば、祖国への思いなど投げ捨て、ヴォラピューク語¹⁵を世界言語として取り入れて、単調さという途方もない退屈さを確定するのが、最も賢明な方法だということになりかねない。この状況を救うには、精神的に連携すること、人々の精神、とくに若者の精神を揺り動かすこと、世論の転換を引き起こし、立法への影響力を手に入れること、そしてさらに、誰にも譲渡できない、侵すべからざる自然や歴史の神聖な遺産を漸次、国家の所有にすることができるよう、多額の資金を調達することである。視野の狭い党派的人間は別として、祖国の真の偉大さと崇高さを心底より理解するすべての人間にとって、このことは最も重要な課題であろう。このようなことのために多額の金を使うことは国民には要求できないと考える人がいるかもしれないが、そのような人に我々はこう答える。ドイツ人はビールやブランデーやたばこという、三つのきわめて疑わ

¹⁵ (訳注) コンスタンツの司祭、J.M.シュライアー(J.M.Schleier)が考案した人工世界語

しい嗜好品のために、年間で 30 億マルクを下らない金を支出しているのである。いろいろな商業博覧会では、現在の最新の流行で、古いベルリン、古いドレスデン、古いライプツィヒあるいはテューリンゲンの村落などといったものではなくてはならないものになっている。つまりここでは、一度壊してしまったものを石膏とボール紙で再び作り上げ、思い上がった道楽の場になっているのだ。そしてこのようならくたのために使う金には決して事欠かないのである。しかし他方で、神意にかなった行動をとるという誠実な気持ちから、余った力や金の唯一の正しい使い道は、それをキリスト教的な愛の使命、つまりあらゆる種類の慈善行為事業に使うことだと考える人々もいる。このような人々には、新約聖書に出てくる女の話を想起してもらうのがよいかもかもしれない。この女は、イエスの頭に「高価な香油」を塗ろうとして、弟子たちに退けられるのだが、この時弟子たちは、「何のために、こんな無駄なことをするのか？この香油なら、高く売れて、貧乏な人たちに施しができたのに」と言う。これに対してイエスが弟子たちに与えた返事を聞けば、似たような制限的な意見（この種の意見は今日でもいわゆるキリスト教のサークルでは一般的であるが）は沈黙せざるを得ないだろう。ここでいう高い正義、高い使命とは、一言で言えば、地上にある美しいものや愛おしいものについての理想主義なのだが、それは宗教的および道徳的理想主義とも不可分に結び付いたものであり、いつの時代についても、これ以上には考えられないほど率直かつ決定的に証明され、確定されているのである。この真実が保守的な側で、いまだに十分に尊重されていないことは残念なことである。

フライブルクの司祭ハンスヤーコブは、民族衣装の保存のための協会を発足させることに成功し、この協会は明らかな成功を取めた。この対象についての彼の著作は、肝に銘じるべき多くの名言を含んでいる。しかし、民族衣装から伝統的な風習や慣習、さらに民衆の建築様式¹⁶ — そもそもドイツの独自性を

¹⁶ (原注) 既にしばしば行われていることだが、ドイツのすべての地方で、とくに重要度の高い古い建築物、住宅、農舎などを詳細に調査し、このような資料に基いてそれぞれの地域に特徴的な要素を新建築に適用する計画を競うコンテストを行う、というようなことが行われる必要がある。この際には同時に、現代の発明による実用的設備からも適切なものを取り上げるようにするのである。さらに、さまざまな地域で、このようなモデルに依拠して、伝統的な性格をそなえた民族色ある家屋を建てるという課題を最もよく遂行した左官のマイスターに、賞金を与えるようにすべきであろう。何よりも無味乾燥さと図式主義に完全にとらわれている、建築専門業種学校に対する影響力を行使できるようにすることが、緊急に必要であることは言うまでもないことである。

問題にするならばこれらを再生することは不可欠の要求である。一に至るまでには、ほんの一步しかないのである。このようなところから出発して、活発な運動が広がってゆき、その影響力を拡大して行って、最終的には北ドイツと南ドイツを合わせて、ここでとりあげた全領域をカバーし、貫徹するというところまでいくことはできないのだろうか。このような飛躍が実際に南ドイツから出てくるとすれば、それは南ドイツが共通のドイツのためになしうる最大の功績というべきであろう。希望はまだ残っている。

本書の言わんとしたことがセヴィリアで受け入れられるとすれば、ついにいたるところで、寝ぼけている人々の間にも目覚めた、生き生きとした意識が生まれてくるという希望ももてる。しかし、今日の時代に何が危機にさらされているのかについての十分な意識が存在するようになって初めて、現代の平準化の体制がもたらす荒廃をいかにしてでも食い止めるようという、不屈の意思も出てくると思われるのである。